

すべての仕事は「肯定」から始まる

(著:丸山俊一(NHK プロデューサー)大和書房より抜粋)

1/30/2016

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

著者は'62年生まれで、現在 NHK のエグゼクティブプロデューサー。NHK らしからぬ番組を世に出しました。例えば、「英語でしゃべらナイト」、「仕事ハッケン伝」、「爆笑問題のニッポンの教養」などです。そして、新しい世代の発言者を発掘し、現在の NHK のスペシャル番組のゲストに欠かせない人となっています。その人の本です。大変楽しんで読め、なるほどという部分がいっぱい出てきました。そのうちの一部をご紹介します。読んでいただいております。

「カミソリになるな、ナタになれ」

カミソリは、その切れ味、スピード感に比例して「錆びやすい」のです。その可能性と限界をよく見極めながらメンテナンスしないと、あっという間に錆びがつき、壁にぶつかってしまうことになりかねせん。

一方、ナタは、ふりかかるにも時間がかかります。標的を定め全身の筋肉を使って体勢を整えてゆっくりと振り下ろす。そこには「大きな構えが必要です」 p.4

「定型化した企画書は作らない」

企画書はプロジェクトのスタートです。そこから「伸びる」「化ける」可能性がどのくらいあるか、想像力を掻き立てるべきものではないでしょうか。 P.17

「企画書」の中ではいきなり、本題に入らず「現状分析」を行うことが大切。現状分析とは、みんなが心の奥底で思っている問題を見つけることにあります。 P.20

企画を実現に向けて「通す」こと、実現した企画を「成長させる」ことは「生む」こと以上に難しい。むしろ大事なものは、すぐに結果が出ないことに焦ってしまい、自らに負けないこと、結果を焦らないこと。 p.58

「自分探し」

「自分探し」のために仕事探しをしているわけではありません。仕事に就いてから、むしろ真の意味での「自分探し」本番が始まるのです。 P.46

「力の抜き方」

野球の場合の例だと、本人は絶好調というときの試合ほど無残な結果になるというのです。多少熱があつたりした場合に限ってバッターを抑え込んでしまうのです。要するに、八分の力でいこう、というときのほうが、いつの間にか完投してしまった、力みが生まれずによかったという経験を語る選手が多いのです。このように自分の体調の悪さ、ウィークポイントを自覚した上で、その消耗のさせ方についても効果的な計算ができることが大切です。 p.91

ある意味、「抜き方」をすることは大事なことです。

「柳に雪折れなし」

雪が積もっても、しなやかにしなる柳の枝は容易に折れません。一方頑丈そうな巨木がある時、あっさりポッキリと折れるのを見かけます。人間であれば、強硬に頑張る人ほど、どこかでポッキリと折れやすいのです。皆さんが巨木のような考え方、生き方なのか、風雪に耐える柳の木のようなしなやかさを持つのはどうでしょうか？ p.97

「異動時の挨拶」

先輩が異動する際にこんな言葉が発せられました。「僕は居心地がよくなると、居心地が悪くなるタイプなので、ちょうどいいタイミングに異動できることを幸せに思います」

親しくなることと、心地よい緊張感を共存させること。これが実は常に新鮮な発想にもつながりマンネリ化することのない仕事への取組みになります。 p. 101

「年齢を重ねることの楽しさ」

人間は変わっていくのです。それもいつの間にか。それは生物としての老い、感覚の変容も含んでいるのかも知れません。それだけでなく、さまざまな経験の積み重ねの中で、感情の襞が複雑に折り重なり、繊細な感受性が生まれていく結果でもあるのです。ちなみに、経営学のピータードラッカーは膨大な著作のうち、およそ3分の2を60歳過ぎてから著したといっています。 p. 142

「小さな目標 ゴールの設定」

漠然と仕事をこなすのではなく、ひとつひとつの作業、ステップの意義を意識化するためにも、「今日の目標」を書き出す作業は決して無駄にはなりません。 p. 162

「自分が社長という意識」

さて、これから30年、どんな波がやってくるのか？

企業に入る、起業する、職人的に技術を極める、時間単位の労働の生産性を上げる。いずれにせよ、どんな仕事、働き方をしようとはっきりしているのは、自分自身の仕事のスタイルは、自分自身で創造的に生み出していくという意味の大切です。

大事なものは、自分が自分の働き方を決める社長だ、という意識だと思います。

そして、そのとき、もっと大切なものは、「肯定」する精神なのです。

変わりゆく社会と自分を閉ざさず、対話し、異質なものを受け入れる姿勢を崩すことのない精神。そのジレンマも笑顔で受け入れる姿勢なのです。 p. 246

以上